

20代～50代なのに、自らを「無縁者」と諦める前に

「無縁社会の世相事象のマスコミ報道に接して（HP「雑学 BN」のマスコミ等コメント関係（VI）、2010.04.05.：参照）」の記事で触れた番組等を見て放送局に寄せられた一万件を超える声があり、その多くは20代～50代の働き盛りの世代からだったとか。

「無縁」となる人たちは高齢者だけでなく、いじめ、虐待、未婚、離婚、DV、失業、リストラ、派遣切り、職場での人間関係の希薄化から、若い世代を無縁社会に引きずり込むきっかけはあらゆるところに転がっており、すさまじい勢いで低年齢化し無縁社会が広がっている現状から、それを乗り越えるための方策を模索する特集番組がつい最近放送された。

寄せられた声の紹介もあったが、概要的には社会での居場所も、自分の存在意義も見失い「無縁死せざるをえない、無縁死してもかまわない」ということのようなのである。

自己否定して自らを追い込まないように、状況を改善するために支える方策を社会として模索するのは当然な取り組みだが、先に当HP記事で触れたように「法や制度だけでは支えきれない側面がある」ことも、まず気づくことが必要でないだろうか。

20代～50代といえば人生の働き盛り、人生の花の年代というのに、「支えてくれる人がいない」、「自分は社会から必要とされていない」、「生きる意味を感じられない」等々の「自分は無縁者だ」というつい受け身的な眩きには、「じゃあ、あなたは、周りの人を支えることを、必要とされることをしているのですか？『己の欲するところを人に施せ！』という言葉をご存じですか？」とつい尋ねたくなる。

また、自暴自若な気持ちだと「目は口ほどにものをいう」の言葉のように表情に表れまですから、周りの人は暗い表情、キツイ表情の人と話そう、係わり合おうとは、そう積極的には思わないのでないでしょうか。

人間って、自らへのマイナス思考を気にし出すと蟻地獄に入り込むようなもので、益々抜けられなくなるだけに、やはり「幸せだから笑顔ではなく、幸せのために笑顔を！」。

まだ20代～50代なのだから「無縁者であってもかまわない」等と早々に諦めず、「人と過去は変えられない。自分と未来は変えられる」の言葉通り、まず自らが変わろうと思うことが大事で、日常の小さなことから人との係わりに心懸けてみることも必要でないだろうか。